



史傳

津崎矩子

(つゝま)

下村三四吉

前回は述べたるが如く、當時外交上の難件の處理は、實に燒眉の急務なりき。これと相關聯せる將軍養君治定の問題は、次第に活氣を加へ來りぬ。これ亦當時にありて、最も事情の紛錯せるものなれば、ここには、その要領を擧ぐるに止めん第十三代將軍家定の養君に關する問題は、既にその端を米艦初度の渡來の年、將軍家慶薨じて家定職をつぎし時に發せり。家定は、生れながらにして多病、到底世子を得べき望なかりしかば、越

前侯松平慶永の如きは、早くも、家定嗣立の始めに當りて、大に之を憂慮し、島津齊彬と相約して一橋慶喜をして將軍の養君たらしめんことを企圖したり。喜慶は、水戸侯徳川齊昭の實子(第七子)にして、三橋の一たる一橋家を嗣ぎ、年既に長け英明の聞えあり、人望多くはこれに歸せり。
一橋慶喜を將軍の養君と定めんことは、大老阿部正弘も賛成せしところにして、幕府に於ける少壯俊邁の士は、深くこれに同意せりき。安政三年の末、島津齊彬の養女篤姫が將軍の御臺所として入興の事終るや、齊彬は、西郷隆盛に命じて、養君治定の事に周旋せしめたり。隆盛乃ち、慶永、土佐の山内容堂及び宇和島の伊達宗城等の諸侯、及び越前、水戸、尾張等の志士と共に計畫するるところあり。さて、隆盛は、一橋を世子に立てん

には、京都に趣きて近衛三條等の公卿に説き、東西相應じて盡力するに若かずとて、京都に入りぬこの時、越前よりは、橋本左内選ばれてこの事に當り、また來りて京都に在り、その他有志の士共に奔走計畫に違なかりき。

一橋養君説は、殆ど當時天下の輿論たるが如き形勢にて、閥老を始め幕吏中の賢士は、更なり、諸侯も、親藩外様の別なく、多くはこれを望めりされば、この問題は直に決定せらるべく、別に計畫運動を要せざるべきに、その困難なりしは、これに反對せる一派の現はれしによるなり。そは、所謂紀州養君派にして、同派にては、將軍養君の候補者として、紀伊藩主慶福を擧げけり。慶福は十一代將軍家齊の孫にして、その父齊順は十二代將軍家慶の弟なれば、現將軍とは従兄弟の間柄な

り。故に、その血統よりいふときは、慶喜よりは遙かに近かりき。年齢は安政三年には、僅に十一歳なりしが、このなほ幼少なる點こそ、却て幕府の大奥及び近臣が擁立を圖りし主意なりしなれ。

此等の輩は、國家を以て憂となすの念なく、ひたすらに、自己の安逸を貪り威福を張らんことをのみ心がけ、賢明なる主君を戴くことを欲せざりきこの時に當り、紀州養君派に最も盡力せりしは、紀州の家老水野忠央にして、大奥の上臈歌橋なるものに結び、家定の生母本壽院夫人（即ちのみつの方）に説きて聲援となし、また側衆たる平岡道弘、藥師寺元眞等とも結托し、百方一橋世子派を妨げたり。その勢力は、表面上は甚だ微弱なるが如しといへども、幕府の大奥は、時に天下の政治をも左右するの勢力ありたれば、一橋養君派に

際して、實に隱然なる一敵國たりき。

かくて、紀州養君派は、密かに將軍に説きて、一橋殿養君とならば、君には忽ち隱居の身とせらるべしといひ、以て將軍の心を動かしぬ。而して一橋養君派の重要なる賛成者たる大老阿部正弘は安政四年六月に病歿し、その後承けたる堀田正篤は、慶喜の生父たる水戸齊昭を嫌厭し、ために、一橋養君派にも力を盡さず、紀州派の漸く勢力を得るに至れる成行に任せたり。

將軍養君の問題につきて、一橋派と紀州派との相對抗せるは、安政元年頃よりの事なれば、ここに至るまで、常に外交問題處分の事と相伴へり。外交問題切迫し内外多難の際に、幼弱の將軍を立てるの不利なることは、火を見るより明かなるを以て、一橋養君派は當初最も優勢にして、紀州養

君派の勢力はさまで注意せられざりしに、奥女中輩の必死の運動は、遂に幕府内部の事情に一變を生ぜしめ、安政五年一月、堀田閣老が米國との通商條約の勅許奏請の爲めに上京せんとする頃に及びては、幕府の内議は皆紀州養君説に傾けり。さてこそ、前節に述べたる西郷 橋本等の入京斡旋の事は起りたるなれ。

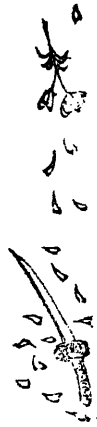
堀田閣老の上京の要件は外交上の事なるが、これがために、養君問題の狀態をして愈々切迫せしむるの機會となりたり。當時隆盛は、幕府の内情を察し、事の容易ならざるを見て、入京前、江戸にて、天章院夫人（即ち篤姬）に説き、夫人より養父近衛忠熙公に書を贈り、建儲の内勅を幕府に下されんを請求せしめ、隆盛自らその書を携へて上京せり。よりにて、隆盛は屢々忠熙公に謁して

計るところありしが、この際、村岡は、深く國事を憂ひ、近衛公への執成は勿論、諸公卿の間に出入するの便宜をさへ與ふることを務め、隆盛をはじめ、諸士の盡力を助くること、少なからざりき。

(つづく)

我宿に春こそ多く來にけらし

咲ける櫻のかざりなれば



文苑

狂女

上

ろすゐ



わはれ浮世のはかなさよ
 來ん幾年の末までも
 吾子と思ひ思はれて
 二人はいつも離れまじ
 よしや妾身は碎くとも
 御身に孝とし思はへば
 いかなる業も厭いじと
 堅く契りし甲斐もなう
 計らず御身はいつしかに
 とある男の子を便とし
 妾身を他處に捨小舟
 棹失ひし心地して
 よるべき方も白浪に
 浮び漂ふわはれさよ
 御身の膝元にまじつて
 思へは長の年月日